代表：文学研究科D3　中井悠貴

2022年度日本思想史研究会

日本思想史における「土着的なるもの」—丸山眞男の「古層」論を中心に—

目的

丸山眞男の「古層」論の輪読を通じて日本における「土着」に関する議論を学ぶ。

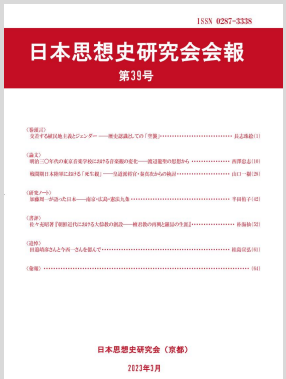
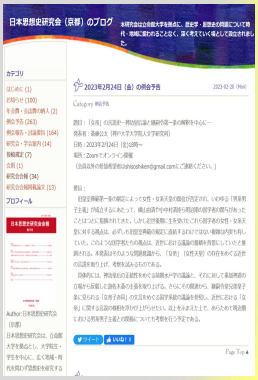
運営方法

- Zoomによるオンライン研究会。今年度は18回開催した
- 春学期（5～8月）
  ZOOMでのオンライン形式で開催した。丸山眞男の「古層」論に関する論考の輪読報告を行った。報告者が資料を作成し、それに沿って輪読を行った。
- 秋学期（10～1月）
  ZOOMでのオンライン形式で開催した。丸山の思想史学を、各自の研究領域と絡めて報告した。日本思想史、政治思想史、哲学を専攻する他大学の大学院生にも参加してもらい、幅の広い議論を展開した。

主な研究内容

- 谷徹也「近世儒学の成立と李文長」
- 陳路「神国思想と儒教史観の相剋——室町時代の「呉太伯後裔説」争論について」
- 吉川弘晃「世界史」をめぐる闘争：西洋史家・鈴木成高の「近代の超克」と方法としての「西洋」
- GU WENYING「「異姓不養」と日本の儒学思想」
- 眞田航「西田幾多郎の純粋経験論における「結合」と「衝突」の問題」
- 玉置文弥「超国家主義と「民衆宗教」—橋川文三の議論を中心に」
- 関根颯一郎「室伏高信の最前期思想について」
- 鈴木健吾「地域史を作る…黒田俊雄から見る国民的歴史学運動の「後史」」
- 西澤忠志「明治三〇年代の東京音楽学校における音楽観の変化--渡辺龍聖の思想から」

総括と今後の課題

- 丸山眞男は1960年代から70年代にかけて、日本思想の底流への探究、いわゆる「原型」論や「古層」論と呼ばれるものへの研究に向かう。同時期に加藤周一が『日本文学史序説』を、吉本隆明が1980年代中後半に『柳田國男論』としてまとめられる一連の論考を著したことも、こうした思想史学的な潮流に位置付けられよう。戦後知識人の思想を学ぶ上で、このような土着性をめぐる議論を等閑視することはできない。

→旧来論じられてきたような、1950年代以降の戦後啓蒙主義の失敗、マルクス主義の相対化の結果としての土着思想への着目といった潮流からではなく、戦後の言説空間をより多面的に把握した上で位置付けることが必要であるという認識を共有した。